

ひとつとふたつ

倍数関係を持つ日本の数え方——偶数性が強く調和的な民族

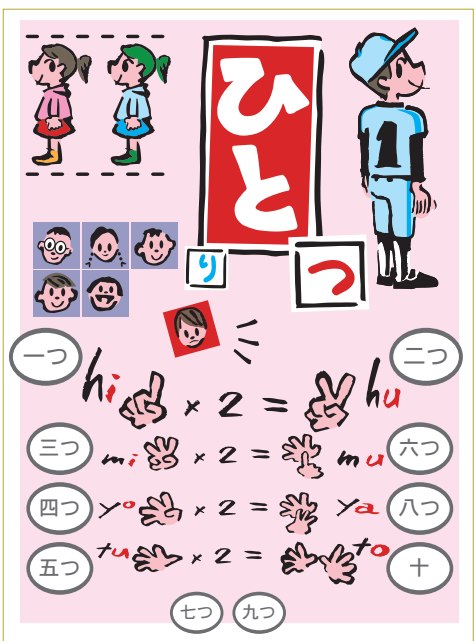
日本語の「ひとつ」「ふたつ」「みつつ」……という数え方には非常に特徴的なものがあります。例えば「みつつ」(三つ)と「むつつ」(六つ)、「よつつ」(四つ)と「やつつ」(八つ)の関係が倍数関係の呼び方となっているのです。

「みつつ」の「み」(mi)と「むつつ」の「む」(mu)は母音を交替させた関係。つまり「みつつ」の倍が「むつつ」です。同様に「よつつ」の「よ」(yo)を「や」(ya)に交替させたものが「やつつ」で、「よつつ」の倍が「やつつ」という関係になっているのです。日本語はこのように母音を交替させていくことで、いろいろな関係する言葉を作っていきます。この本の中でも母音交替のことは繰り返し出てきます。

まず「ひとつ」(一つ)ですが、これは「人」からできた呼び名です。「人ひとり」を単

位として、数を数えはじめたのです。そこで「ひとつ」と「ふたつ」の関係ですが、江戸中期の儒学者・荻生徂徠の著書『南留別志』に「ふたつはひとつの音の転ぜるなり」とあるように、これも「ひと」(hitoto)と「ふた」(huta)が母音交替した言葉です。つまり「ひとつ」(一つ)の倍が「ふたつ」(二つ)の関係です。また「いつつ」(五つ)と「とを(とお)」(十)も「つ」(tu)と「と」(to)が母音交替になっているので、「いつつ」(五つ)の倍が「とを(とお)」(十)の関係になっているのです。

さらに説明すると「みつつ」の「みつつ」は「満つ」の意味です。「よつつ」の「よつ」は「弥」(よ)と同じ意味。「弥」は「弥」の変化した「いよ」を重ね強調したもので「なおいつそう」の意味です。「満つ」の上にさらに加えること。「いつつ」は「いと」のことで「これでもう最高である」という意味です。ある時までの日本人は「五つ」までしか数えない民族だったかもしれません。「いつ」(五)について、白



川静さんも「ある時期においては、それは最高の数字であったはずなのです」と、『文字講話』の中で述べています。「むつ」（六つ）の「む」には、中に蓄積する「蒸す」というような意味があつて、倍数的に数が増える意味です。「なな」（七）は「並無」で、倍数関係がなく「並ぶことが無い」ので奇数の意味という説、また片手で指を折つて数えていくと、七つ目が「名無指」（薬指）だから「なな」という説があります。「やつ」（八）は「弥」と関係して「それよりもつ」という意味です。「ここのつ」（九つ）は「屈並べ」というように片手で指を屈して数えられる究極の数のことです（片手で数えるイラストは一〇七ページにあります）。この「かか」（kaka）と「ここ」（koko）も母音交替です。「とを（とお）」は多く熟する「たわわ」と関係しているような言葉です。

数の数え方で、こんなにも倍数関係を持つ日本人は偶数性の強い民族で、その偶数性から相対的・調和的な特徴を持っているようです。「八百万の神」「八岐大蛇」など、大切な数字、聖数にも偶数を多く持つ民族です。

これに対して、中国は奇数性の強い民族です。「天地人三才」「陰陽五行」「七賢」など中国の聖なる数は奇数が多いのです。白川静さんによると、中国の聖数に奇数が多いのは「中心に自らを置けるから」のようです。五行思想の方角でいえば、まず中央があり、周囲に東夷・西戎・南蛮・北狄の東西南北があるという中華思想が聖数の奇数性にあらわれているのです。「夷・戎・蛮・狄」はいずれも野蛮な異民族という意味です。中央に分たちがいて、周辺に野蛮な異民族がいるという考えです。「中国」も中華思想が反映した、世界の中心の国という意味ですから、国名にも中心性が表れています。

日本の数の成り立ちを紹介したので、漢字の数についても説明しておきましょう。漢字には日本語のような倍数関係がありません。「一」から「十」までがすべて異なります。「一」「二」「三」は見ての通り、数を数える時に使う算木を横向きに置いた形です。実は「四」も甲骨文字では横に四本の算木を置いた字形でした。でも算木の線の数が紛らわしい場合もあるので、「𠄎」の省略形「四」で表すようになりました。「五」は木を斜めに交叉させて作った器物の蓋の形です。「六」はテントの形。「七」は切断した骨の形です。「四」「五」「六」「七」は文字の音だけを借りて、別な意味を表す仮借という用法です。「八」は左右にものを分けて数える数え方をそのまま字形で示したものです。

「九」は身を折り曲げた竜の形です。数字の「九」の意味に用いるのも仮借の用法です。算木を横に一本置くと「一」ですが、算木を縦に一本「一」と書いたのが「十」です。縦に一本の線を書くと「十」を示すことは「二十」を「廿」と書くことや「三十」を「卅」と書くことに、今も残っています。「十」の古代の文字は「一」の中央部が膨らんだ形をしていて、この膨らんだ部分が左右横に伸びていつて「十」という字形になりました。